

周東のぞみキリスト教会 講壇交換 主日礼拝 2020年7月12日(日)

宣教：ピリピ人への手紙1章21節

題：生きることはキリスト

今朝はたった一つのみことば、21節のみことばを通して、永遠のいのちに生かされる望みについて、ともに教えられたいと願います。

1. 生きることはキリスト

開かれているピリピ1章の後半は、イエス・キリストのよみがえりによって生かされる私たちの信仰の歩みを導いてくださる御言葉と言える箇所です。ピリピ1章の特に20節と21節の御言葉は、絶えず私たちの心に響かせたい御言葉の一つであり、私自身も信仰の歩みにおいて大きな意味をもたらしているのです。

この手紙を書いた使徒パウロはこう語ります。21節。「私にとって、生きることはキリスト、死ぬことは益です」。生きることはキリスト、死ぬことは益。パウロは自分の生涯をキリストの「福音の前進」(12節)というものさしに当てて受け取る人でした。自分の成功や自分の夢の実現、または自分のこの世での繁栄とか、そのようなことで自分の人生の価値を量りませんでした。キリストの福音の前進につながるか、という基準において自分の人生を見つめているのです。パウロが行き着いた人生観。それがこの「生きることはキリスト、死ぬことは益」という言葉にギュッと凝縮されているのです。

「生きることはキリスト」。ほんの一言の言葉です。実に深く、広く、確かな響きがあります。「何のために私は生きるのか？」私たち人間誰もが人生において問う最大の問いです。多くの人はこの問いと正面から向き合うことを避けて、その場しのぎの答えで何とか日々を生きていこうとします。この最大の問いに向かい合って、その答えが見出せないことを不安に思います。そして、別のものを人生の目的に見立て、それで満足しようとしています。けれども、実際はどうでしょうか。今日、どれほどの多くの人々が人生の本当の目的を見失い、自分の価値も他者の尊厳をも認めることができなくなってしまい、絶望の淵を歩いていることでしょうか？私の人生の目的はこれです。私はこのために生きていますとはっきり言えるものを、人は心の底で切実に求めているのではないのでしょうか。

2. よみがえりの主と出会って

私たちは、パウロの大胆な言葉を聞くと、すぐパウロと自分自身との間に大きな隔たりを感じてしまいます。けれども、私たちが忘れずにおきたいことがあります。それは、パウロにとってはじめに出会った主イエス・キリストは、よみがえられた後のイエス・キリストだという事実です。この点は、パウロと他の弟子たちとの大きな違いです。同時に、この点はパウロと私たちの大きな共通点でもあるのです。

使徒の働き9章に記されたパウロの回心の出来事を振り返ってみましょう。かつてイエス・キリストと出会って救われる以前のパウロは、イエス様を憎み、教会と信徒たちを苦しめる迫害者でした。けれども、ダマスコに向かう途上でパウロは復活の主イエス・キリストと出会います。使徒9章1～6節をご覧ください。

「さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。ところが、道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。彼は地に倒れて、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。』という声を聞いた。彼が、『主よ。あなたはどなたですか。』と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる」。

ここで光の中からパウロに語りかけたお方は、復活の後のイエス様でした。このお方との出会いを通して、彼の人生は大きく方向転換をはじめたのです。それ以前の、キリスト教徒迫害の意に燃えていた時のパウロは、将来の成功の人生を約束された、ユダヤ社会のエリートだったのです。けれども、その彼がよみがえりのイエス様と出会ったことで、ガラッと変わった。イエス・キリストの福音の前進のためにその生涯をささげ、ついには獄に繋がれるような人生を、そして命すら落としかねないような人生を生きるまでとなった。そのような生涯を、パウロは「生きることはキリスト、死ぬことは益」とまで言い切る者となったのです。

一体、パウロにどのような変化があったのでしょうか（間）少し先取りしてピリピ3章4節以下の御言葉を聞いていきましょう。

「ただし、私には、肉においても頼れるところがあります。ほかのだれかが肉に頼れると思うなら、私はそれ以上です。私は生まれて八日目の割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者です。しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのためにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています」。

3. よみがえられたイエス様との出会いの喜びに生かされて

「生きることはキリスト、死ぬことは益」と言うように、パウロを支えて生かして下さった確信があります。それは「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさ」です。復活のイエス様との出会いの喜びが、パウロの生涯を大きく変えたのです。その大きな喜びと輝きの前では、それまで彼の人生の価値観であった地上的な成功や

富、地位や名声はみな色褪せて輝きを失いました。それで、今までのそれらに対する執着やこだわりから「これも私には必要ないもの」と手離して、解き放たれて、イエス様との出会いの喜びの中に、イエス様にある本当の自由の中に生き始めることができたのです。

この復活の主イエス・キリストとの出会いにおいては、パウロも私たちもなんら変わることはありません。私たちもまたそれぞれの人生の途上において、よみがえりの主イエス・キリストとの出会いを経験しました。今まさにその経験の最中にあられる方もいるでしょう。イエス様との出会いの形は、一人ひとり全く違っていて多様です。けれども確かなことが一つあります。それは、イエス様が、この私の罪のために十字架にいのちを捨ててくださったこと。三日目によみがえってくださって、私たちのために本当の罪の赦しと永遠のいのちの祝福を勝ち取ってくださったこと。私たちはもはや完全に罪赦されて神の御前に義なる者と認められ、聖なる者とされていること。そして、もはや私たちは罪の奴隷としてでなく、自由の子ども、神の子どもとして生きる者とされているという恵みの事実です。そしてこの良き知らせとしての福音は、今朝も、皆さん一人ひとりに対して招きの声をかけられて、この救いを価なしに受けとりなさいと、私たちを招いていてくださっているのです。

「生きることはキリスト」。このようにきっぱりと自分の人生の目的、生きる意味を言いきることのできる確かな人生を、よみがえられたイエス・キリストは今日も私たちに与えようと備えていてくださいます。私たちは、迷い悩む人生の中で、自分自身が生きる意味すらも見失い、生きることへの力も失ってしまうような闇の時があります。けれども、聖書は私たちを照らす光があることを教えます。私が確かに生きる目当てがある。生きる目的がある。そして生きることそのものに対して、「あなたは私の愛する子」とあなたに呼びかけてくださる神の大いなる肯定があります。その源が、復活の主イエス・キリストにあることを心から信じていきましょう。そして、ぜひ、このお方を私の救い主、私の人生の目的であると心に受け入れていただきたいと切に願います。